

Title	身体実践とより良き生：シュスターマンとドゥルーズの共鳴
Sub Title	Body practices and better ways of living : resonance between Shusterman and Deleuze
Author	西川, 耕平(Nishikawa, Kohei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2025
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.155 (2025. 3) ,p.17- 42
JaLC DOI	
Abstract	This paper compares the philosophy of the American pragmatist Richard Shusterman with that of Gilles Deleuze, focusing on the points of agreement and disagreement. First, in preparation for the comparison, we will summarize Shusterman's pragmatism which emphasizes the concept of experience and aims for improving one's manner of living through bodily practices. Next, we will analyze his unique conception of the body, "somaesthetics", based on his pragmatism while also referring to Deleuze's aesthetics and theory of body influenced by Spinoza. We will then examine Shusterman's claim that he and Deleuze share two important philosophical orientations: a respect for the idea of experience in philosophy and a pragmatic stance. The basic tone of Deleuze's thoughts on body practices echoes that of Shusterman's, which is aimed at living well, but Shusterman also notes that they part company over their attitudes to metaphysics and the concrete methods of physical practices for which he insists those of Deleuze are too deviant. In the end, we will show that Deleuze, in contrast to this comment, rather recommends experimenting with prudence to avoid self-destructive practices. In terms of this meliorism concerning experience, Deleuze's philosophy can be said to have an affinity with pragmatism.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000155-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

身体実践とより良き生

——シュスターマンとドゥルーズの共鳴——

——西 川 耕 平*

Body Practices and Better Ways of Living: Resonance between Shusterman and Deleuze

Kohei Nishikawa

This paper compares the philosophy of the American pragmatist Richard Shusterman with that of Gilles Deleuze, focusing on the points of agreement and disagreement. First, in preparation for the comparison, we will summarize Shusterman's pragmatism which emphasizes the concept of experience and aims for improving one's manner of living through bodily practices. Next, we will analyze his unique conception of the body, "somaesthetics", based on his pragmatism while also referring to Deleuze's aesthetics and theory of body influenced by Spinoza. We will then examine Shusterman's claim that he and Deleuze share two important philosophical orientations: a respect for the idea of experience in philosophy and a pragmatic stance. The basic tone of Deleuze's thoughts on body practices echoes that of Shusterman's, which is aimed at living well, but Shusterman also notes that they part company over their attitudes to metaphysics and the concrete methods of physical practices for which he insists those of Deleuze are too deviant. In the end, we will show that Deleuze, in contrast to this comment, rather recommends experimenting with prudence to avoid self-destructive practices. In terms of this meliorism concerning experience, Deleuze's philosophy can be said to have an affinity with pragmatism.

* 文京学院大学非常勤講師

序

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925–1995）は、20世紀のいわゆる大陸哲学を代表する哲学者の一人として知られている。しかし、ドゥルーズが大陸哲学者であるということは、彼が英米の思想と没交渉であるということを意味するわけではない。それこそ、ドゥルーズの最初期の仕事がヒューム研究であったのは周知のことであろう。加えて、1980年以降のさまざまな著作で、ドゥルーズは19世紀アメリカで芽生えたプラグマティズムに触れている。たとえば、映画論『シネマ』（1983年、1985年）においては、全体を貫く参照軸としてパースの記号論が導入されている。ライプニッツを主題とする『襞』（1986年）においては、バロック的なパースペクティヴィズムに与する人物としてウィリアム・ジェイムズの名が挙げられている（Deleuze 1986: 27）。『批評と臨床』（1993年）に所収されているメルヴィル論においても、ドゥルーズはアメリカのプラグマティズムを、皮相な哲学理論ではなく「世界を変え、新しい世界、自らを形成するものとしての新しい人間を思考するための試み」（Deleuze 1993: 110）であるとみなし、高い評価を与えている。

しかし、ドゥルーズ自身が肯定的にプラグマティズムを扱っているにもかかわらず、ドゥルーズ哲学とプラグマティズムとの関連が十分に論じられているとは言い難い¹。その要因の一つとして、プラグマティズムの哲学者らがドゥルーズ哲学に言及することはごく稀であることが挙げられる。たしかに、20世紀後半におけるプラグマティズム再評価の立役者であるリチャード・ローティは、ドゥルーズのニーチェ論に対して厳しい批評を加え（Rorty 1983）、また、フーコーと並べてやや肯定的に言及している（Rorty 1982: xviii）。しかし、これは例外的な事例と言ってよく、さらには、ローティがドゥルーズの哲学を十分に論じるほど読み込んでいたかについても疑問が残る。

そのため、プラグマティストを自認し、独自の身体論や美学を展開して

いる哲学者リチャード・シュスターマン (Richard Shusterman, 1949-) が、2019 年に行なわれたインタビューにおいて、自身とドゥルーズの哲学の共通点と相違点について語っていることは類例がないため注目に値する (Shusterman 2022b: 268–270)²。そこで本稿では、このインタビューを吟味することを通して、シュスターマンとドゥルーズ、ひいてはプラグマティズムとフランス現代思想の協和と不協和がどこに存するか、その一端を見出すことを試みたい。

しかし、そうしたインタビューがあるという事実をもって、シュスターマンをプラグマティズムの代表者として扱うことには異論が唱えられてしかるべきだろう。シュスターマンの思想がプラグマティズムにおいて重要な位置を占めていると評価されているわけでもない。そもそも、プラグマティズムは、伊藤邦武 (2016) が紹介しているように百年以上続く思想の運動であり、現代に至るまでさまざまな形態をとっている。たとえば、言語論的転回を引き受け、ジェイムズやデューイを参照しつつ、相対主義的な方向に向かったローティのプラグマティズム (ネオプラグマティズム) もあれば、パースを再評価することを通してその方向を修正しようとするシェリル・ミサックのそれ (ニュープラグマティズム) もある。それこそ、ミサック自身が推し測っているように、「昨今ではプラグマティストたちは分厚い層を成している」 (Misak 2013: 246) のだろう。

したがって、本稿は、シュスターマンとドゥルーズの比較を検討するのに先立って、まずはシュスターマンのプラグマティズムはいかなるものであるか、その特色を明らかにする (第 1 節)。続いて、シュスターマンの「身体感性論 (somaesthetics)」の内実を明らかにする (第 2 節)。そして、ドゥルーズの感性論および身体論を簡略に整理し、シュスターマンの思想と若干の比較を行なう (第 3 節)。その上で、シュスターマンのインタビューの内容を検討し、「経験」という観念の尊重やプラグマティックなスタンスをドゥルーズとシュスターマンは共有していること、さらには

シュスターマンが挙げる両者の不一致について論じる（第4節）。しまいには、シュスターマンから投げかけられるドゥルーズおよびドゥルーズ＝ガタリの語る身体実践は逸脱的にすぎるという指摘に対して、実際には彼らは自己破壊的な実践を避けるために慎重さを伴う実験の実施を推奨していることを示す（第5節）。

1. シュスターマンのプラグマティズム：経験の重視と改善主義

シュスターマンは最初からプラグマティズムの道を歩んでいたわけではない。彼は、1979年にオックスフォード大学で哲学の博士号を取得してから、1988年にT. S. エリオットについての論考を刊行するまでは分析哲学者であった。その後、プラグマティズムへと接近していくようになるが、その際にシュスターマンに古典的なプラグマティズムを再考するように促したのはローティであった（Shusterman 2022a: 244）。

シュスターマンはその勧めに従ったものの、ローティが期待したような方向に進んだわけではない。たしかに彼はローティと同じく、ジェイムズとデューイを再評価しており、たとえば反基礎づけ主義・反本質主義については両者ともその態度を引き継いでいる。しかし、ローティがプラグマティズムから追い出そうとする「経験」という概念を重要視するところが、シュスターマンとローティを大きく隔てている。ローティに反してシュスターマンは、「私にとってプラグマティズムは何を意味するか：十の原理」という文章の中で、プラグマティズムにおいて重要な役割を果たす基本的なテーマの一つとして「経験的、経験優先の姿勢」を挙げている³。リチャード・バーンスタインは「プラグマティズムから経験を消し去れば、プラグマティズムは骨抜きになり、あとにはうつろな影しか残らない」（Bernstein 2010: 128）と主張しているが、そちらの側にシュスターマンは立つのである⁴。

この点に関連してバーンスタインは、ローティに見られるような経験ぬ

きの「言語論的プラグマティズム」は、「言語的観念論」に陥ってしまい、日常的な生活世界との接触に欠けがちであったり、哲学の対象とすべき人間の経験が限られてしまうという点で貧弱であると見なしている。そして、「言語論的転回」（その定義がどうあれ）よりあとの時代に生きる哲学者は、経験と言語について、パース、ジェイムズ、デューイ、ミードからなお多くを学ばねばならないのだ」（Bernstein 2010: 152）と述べる。

1997 年に公刊されたシュスターマンの『プラグマティズムと哲学の実践』第 6 章は、デューイを素材として、バーンスタインによるこの提言にあらかじめ応えたものだと解しうる。そこでシュスターマンは、認識論上の「所与の神話」に私たちを誤り導く恐れのある「経験」という概念をデューイは捨てるべきであったと論ずるローティに対して、デューイの経験概念の肯定的な意義を主張している。シュスターマンによれば、経験——それも直接的で非言説的な経験——はプラグマティズムにおいて依然として肝要な役割を担っているのである（cf. Shusterman 1997: 158）。

シュスターマンが強調したいのは、「非言語的経験についてのデューイの主張が、究極的には認識論的な基礎づけの探究とは別のものによって動機づけられているということを示唆している」（Shusterman 1997: 161）ことであり、それが感性論（美学）や身体論を展開するのに役立つということである。シュスターマンの見るところ、デューイによる重要な主張は、われわれの最も激しくいきいきとした価値は自分自身で経験する質と感情のそれであって言説的な真理といった抽象物ではなく、非言説的な身体的経験は認知と行為において重要な役割を果たしているというものである。（cf. Shusterman 1997: 166）シュスターマンは、認識の正当化や基礎づけのために用いられるものとして経験を捉える枠組みから外れて、感性論（美学）や身体論の観点から経験の概念を復権することを試みており、それは哲学やプラグマティズムにとっても重要であると言う。

哲学は伝統的に言説的理性に焦点を当ててきたのだけれども、人間の現実について十全な説明を与えるという哲学の前提とされる任務は、非言説的な経験の役割を認めることを要求したのである。さらに、プラグマティズムは現実を単に説明するだけでなく、それを改善しようとするのであれば、非言説的な経験の価値は、実現されるべき企てとして、さらに一層重要になるだろう。そして、その重要であるにもかかわらずきわめておろそかにされてきたものが、身体なのであった。(Shusterman 1997: 167 [強調：引用者])

繰り返しの指摘になるが、シュスターマンは言語論的転回を重視するプラグマティストらからは厄介払いされがちな非言語的な身体的経験を強調している⁵。さらに、上の文章では現実を改善する際にもそれを考察の外に置くことはできないと付け加えている。こうした「改善主義 (meliorism)」もシュスターマンの哲学の特徴である。「私にとってプラグマティズムは何を意味するか：十の原理」でシュスターマンは、「プラグマティズムの前提は、世界は打ち延べて変えることができ、人間は本質的に能動的であるというものであるが、これはより積極的に改善主義的な態度を促す。行為が本質的であり、世界がわれわれの行為によって部分的に規定されるのであれば、その行為を経験の改善に向ける方がより理にかなっており、われわれの行為は何らかの仕方では効果的であると信じる方がより有益である」(Shusterman 2010: 64 [強調：引用者])と主張している。

この改善主義は、多元主義の立場から世界の改善可能性を主張するジェイムズの世界改善説とも (cf. Bernstein 2010: 61)、探究を通してより良い信念を獲得することで疑念のある状況を改善しようとするパースの改善主義とも異なる (cf. Misak 2013: 35)。むしろ、より良い自己やより良い社会を実現することに重きを置くデューイの改善論に最も近いだろう (cf. Misak 2013: 131-132)。その際に身体の実践から始めるというのがシュ

スターマンの思想の特徴である。彼は、「より良く生きられる経験の生成」をプラグマティズムの目標として立てるならば、言語的な実践だけではなく、非言説的な経験に焦点を当てる身体訓練の実践が役立つだろうと言う (cf. Shusterman 1997: 173)。たとえば、習慣になっている（もしかすると悪い）姿勢や呼吸の仕方を改善することで、知的行為を含めて日々の生活をより良くすることができる。また、社会制度との関連で言えば、フーコー流の規律・訓練によるような身体のコントロールからの脱却という論点に合流し、自己や社会の改善を企図することにもつながりうる (cf. Shusterman 1997: 167–168)。

こうした身体的経験と改善主義の尊重を基底として、シュスターマンは、「哲学は、われわれが自己理解と自己創造を、美、潜在力、快を、直接経験の改善された生き方への再構築を、探究することができる身体的実践の多様性に、もっと批判的なまなざしを向ける必要がある」(Shusterman 1997: 167–168) と主張する。そしてその探究のプロジェクトこそ、彼が「身体感性論 (somaesthetics)」と呼ぶものである。

2. シュスターマンの身体感性論 (somaesthetics)

身体感性論の分析に移る前に、プラグマティズムとは異なるシュスターマンの思想の源流に触れておこう。彼は、自身の哲学に大きな影響を与えた人物として、プラグマティズムを紹介してくれたローティと現代美術から美学を学ぶ方法を教えてくれたアーサー・ダンターに加えて、美学と哲学全般の社会政治的な側面に目を向けさせてくれたピエール・ブルデューの名を挙げている。1990年にパリの国際哲学コレージュ (Collège international de philosophie) でピエール・ブルデューと共同で研究していたことは、ヨーロッパの知的文化により詳しく触れる契機ともなったと振り返っている (cf. Shusterman 2022a: 244–245)。

実際に、『プラグマティズムと哲学の実践』には当時のフランス哲学界の

影響を見てとることができる。その副題“Pragmatism and the Philosophical Life”が示しているように、シュスターマンはこの書物で「哲学的な生き方」あるいは「生きる技芸」を主題の一つにしているが、そこで彼はミシェル・フーコーの後期の仕事や、ピエール・アドの『生き方としての哲学』（1995年）を「先駆的研究」として評価している（Shusterman 1997: 7）⁶。ここには、より良い生き方やより良い自己を探究するというデューイ流の改善主義が響いているが、シュスターマンの哲学の「核」はおそらくここにある。そして、この文脈においても身体的経験を重要視する彼は、「哲学が単なる理論ではなく、まるごと人生の実践であるとするならば、それは本質的に、身体的な生のなかで具現化されなければならない」（Shusterman 1997: 48 [強調：引用者]）と語るのである。

こうした考えを基盤として彫琢されたシュスターマンの「身体感性論 somaesthetics」はどのようなことを企てているのだろうか。彼の定義によると、「身体感性論とは、感覚－美学的受容（アイステーシス）と創造的自己形成の場としての身体の実験と使用についての、批判的・改良主義的な研究である」（Shusterman 2000: 267; シュスターマン 2019: 175）。

まずは、somaesthetics という語の成り立ちそれ自体に目を向けよう。これは、身体を表すギリシャ語のソーマ（soma）と英語のエステティックス（aesthetics）を組み合わせで作られた造語である。なぜシュスターマンは body ではなく soma という語を使用するのだろうか。ある解釈者の整理に従うならば、デューイと同様、シュスターマンは、身体（body）と心（mind）とは絡み合っており、連続した一体的な全体として捉えなければならないと考えているからだ⁷。シュスターマン自身も「ソーマ、自己、社会」という論文において、「soma」とは単なる物理的な身体ではなく、「精神的、社会的、文化的な次元を含む、生きている感覚的で意図的な身体」（Shusterman 2011: 315）であると述べている。また、前節で取り上げたプラグマティズムの原理について述べた論文では、意志さえも身体的な習

慣の機能であると主張するデューイをやはり評価している (cf. Shusterman 2010: 61). これらのことから、心－身の両面に及ぶものとしての身体を言い表すために日常的には使われない soma という語をシュスターマンは採用したのだと言えるだろう⁸.

それでは、soma と結びつけられている aesthetics の意味内容はいかなるものだろうか。先にあげた定義のなかで「感覚－美学的(sensory-aesthetic)」というハイフン付きの形容詞が採用されていることにも表れているが、ここでの aesthetics は「感性論」と「美学」の二つの意味を孕む両義的な語であると考えられる。シュスターマンが美学研究にもその身を置いていることに鑑みれば aesthetics を「美学」と訳す方が適当なように思えるかもしれない。もちろん、トピックによっては somaesthetics を「身体美学」と訳した方が理解しやすいこともあるだろう。しかし、シュスターマンは、美や芸術をわれわれの日常生活と切り離して論じることはない。また、スポーツや武術、さらに具体的には彼自身がプラクティショナーとして取り組む身体訓練法であるフェルデンクライス・メソッドを、シュスターマンは somaesthetics の実践例として挙げている (シュスターマン 2019: 179–180)。これらの身体実践を「美学」という語で言い表すのは難しいだろう。上の定義にもあるように、身体経験の改良がめざされているのであり、美学の領域が探究の対象となる場合にもその視点は見過ごされてはならず、感性論としての美学として捉えられるのである。

これらのことを踏まえて、日本におけるシュスターマンの紹介者の一人である樋口聡は、「aesthetics はそのもともとの意味であるアイステーシスの論すなわち「感性論」と捉えるべきである」(樋口 2019: 187) とし、somaesthetics を「身体感性論」と訳しており、その理解は正当だろう。シュスターマンの身体感性論は、身体についての分野横断的な理論的探究を重ねつつ、広く身体に改善を促しうるものを区分しながら各々の効能を明確化し、それらの理論的・言説的な探究にとどまることなく、実際に何かし

らの訓練法を実践して自身の身体の改良・再構成を試みるものであると要約することができる (cf. 樋口 2019: 190–192)。こうした非言説的な身体経験としての実践の次元が含まれていることが重要である。これを欠いている場合、身体感性論はより良い自己を実現するためのプロジェクトとしての機能を十分に果たしていないことになるからである。

3. ドゥルーズの感性論とそのスピノザの身体論

ここで一旦ドゥルーズの感性論に目を向ければ、『差異と反復』において彼もまた、シュスターマン同様、エステティック (*esthétique*) に二重の意味を込めていることを見出すことができる。というよりも、ドゥルーズは、*esthétique* が「現実的なものに関して可能な経験に合致するものしか保持し得ないような、感覚されうるものについての理論としての感性論」と「現実的なものの現実性を、それが反映するかぎりにおいて取り込むような、美についての理論としての美学」の二つの領域に分裂する事態を避けようとしている (Deleuze 1968a: 94)。感性論と美学に *esthétique* が分裂することに対するドゥルーズのこの危惧は、カントの能力論に対する批判の文脈のなかにある。

雑駁にまとめれば、カント哲学において経験が可能になるのは、悟性が感性的所与にカテゴリー (悟性概念) を適用することによってである。だが、ドゥルーズによれば、「このようなカテゴリーは、実在的なものに対しては、あまりにも一般的であり、ゆるすぎる」 (Deleuze 1968a: 94) ため、そこから外れたものを取りこぼしてしまう。逆に言えば、カントの理論において「感覚されうるもの」とは、その枠内、すなわち悟性と感性とが協働することで認識可能にしているものに限られることになる。ドゥルーズの整理にしたがえば、この悟性と感性に加えて理性と構想力を含む諸能力がアプリアリに一致しているとき、われわれは「共通感覚 (*sens commun*)」の形式の下にある (cf. Deleuze 2002: 84)。この形式の下においては諸能力

が協働して同一の対象に向かい、感性は「感覚されうるもの」を、記憶力は「思い出されるもの」を、思考は「思考されるもの」を、あらかじめ設けられたモデルに基づいて感覚し、思い出し、思考するのみである。

ドゥルーズはこのようにして得られる「可能な経験」とは異なるタイプの経験を探究している。共通感覚の形式から解き放たれ、諸能力の協働が解体されている状態における経験をめざしている。その中では、感性は悟性と協働せずに、カテゴリーとかかわりなく、「感覚されるべきもの」「感覚せざるを得ないもの」を感性に固有の対象として捉える。これらのものは、一般的な概念の下では「感覚されえないもの」であり、ドゥルーズによって「出会いの対象」や「シーニュ」と形容される (Deleuze 1968a: 182)。これらは、紛らわしいことに「感覚されうるものの存在」とも呼ばれるが、これは可能な経験における「感覚されうるもの」とは対立する、カテゴリーによっては捉えられない差異である (cf. Deleuze 1968a: 80)。

こうした領域に属するものを芸術作品は開示するとドゥルーズは言う。芸術作品を通して、一般的なカテゴリーや共通感覚＝常識 (sens commun) の形式の下では感覚されえないようなものが、感覚せざるを得ないものとして立ち現れてくると考えているのだろう (cf. Deleuze 1968a: 94)。だからこそドゥルーズは、*Ésthetique* を経験の諸形式に関する理論 (感性論) と、実験としての芸術作品に関する理論 (美学) が一体となったものと捉えることの意義を強調するのである (cf. Deleuze 1968a: 364)。

そのためドゥルーズは、シュスターマン同様、芸術を日常生活と切り離されたものとは考えない。芸術作品は、共通感覚＝常識の下である意味ではルーチン化されてしまっている習慣から身を引きはなし、「感覚されるべきもの」を経験する契機をもたらしうるものである。共通感覚の形式の下での諸能力の協働が解体されているという点でより型破りであるものの、感性が「思い出されるべきもの」を思い出そう記憶を強制し、そして記憶が「思考されるべきもの」を思考するよう思考に強制すること

で、これまでとは別の思考が発生する通路を描いている (cf. Deleuze 1968a: 183–184). 少なくとも、習慣化された身体ひいては精神を再構成することを重視するところは、ドゥルーズとシュスターマンに共通していると言えるだろう.

ところで、ドゥルーズは身体をどのように捉えているのだろうか. ドゥルーズは、スピノザを受けてことあるごとに「身体は何をなしうるか (Qu'est-ce que peut un corps; What a body can do)」というフレーズを繰り返す⁹. スピノザに同調するドゥルーズによれば、身体的能力と特徴はあらかじめ出来上がったものとして与えられることはなく、身体的活動力能に絶えず影響を与える何らかの情動 (affection) との関連のもとでのみ規定される¹⁰. 別様に言えば、身体に何ができるかは身体にかかわる情動がいかなるものであるかに常に依存しており、また、身体には最終的な均衡状態といったようなものは存在せず、身体を新たに触発する出会いの度に身体は変容を繰り返すとドゥルーズは捉えているのである.

さらにドゥルーズは、身体は触発されて変容するだけではなく、触発するものでもあるという. スピノザを読解しながら、ドゥルーズは身体を規定するのは「触発し、触発される能力 (pouvoirs d'affecter et d'être affecté)」(Deleuze 1981: 165) であると主張する. ドゥルーズは、身体を触発の関係の観点から適切に文脈化して把握することを呈示しており、身体は何をなしうのか、身体はいかに機能するのかを考察するためには、その身体がどのような状況に置かれているかを無視することはできないと論じている (cf. Deleuze 1981: 166–168)¹¹. 身体について深く知るためには、「身体が示す情動ないし触発は、他の身体が示す情動と組み合わせるのか、あるいは組み合わせらないか」(Deleuze et Guattari 1980: 314) を明らかにすることが求められるのである.

このことから実験することの大切さが帰結する. ある組み合わせや出会いにおいて身体は何をなしうのかをあらかじめ知ることができないなら

ば、いかに触発し、触発されうかを実際の体験の中で見出していくことになるだろう。ドゥルーズが言うには、「長きにわたって実験をつみかさね、息長く慎重に、スピノザ的な知恵をもって」(Deleuze 1981: 168) 探究することが求められるのである。

以上のように、スピノザ主義的なドゥルーズの身体論は、「身体とは何か」ではなく「身体は何をなしうるか」に焦点を当てるものである。言い換えれば、本質ではなく、機能（はたらき）を状況の中で絶えず問いながら、実験を通じて身体を探究しつつ組み立てていくことに眼目がある。スピノザが『エチカ』において活動力能の増大をよしとしていたことを勘案に入れば、この身体論はシュスターマンの改善主義的な思想と大きく隔たっているとは言えないだろう。

4. 共鳴するシュスターマンとドゥルーズ

以上で見てきたように、身体を経験を重視し、自己の身体や精神の再構成を志向することに関しては、シュスターマンとドゥルーズは方向を同じくしているように思われる。ならば、シュスターマン自身にはドゥルーズの哲学はどのように映っているのだろうか。彼は、2019 年に行なわれたインタビュー内で、ドゥルーズとは二つの重要な哲学的志向を共有していると語っている (Shusterman 2022b: 268)。一つは、非言語的なそれを含めて「経験」という観念を尊重していることであり、もう一つは、プラグマティックなスタンスとでも言うべきものである。順に見ていこう。

一つ目の「経験」について、美的経験などの非言語的な経験を考察から排除しないことは、言語をあまりに重視しすぎたり、常に概念やカテゴリーに頼る哲学者たちからシュスターマンやドゥルーズを際立たせていることはすでに見てきた。シュスターマンによれば、彼自身とドゥルーズは二人とも強い美的経験を含めて、並外れた経験にはある種の開示的な力があると考えている (Shusterman 2022b: 269)。たとえば、「身体感性論は、

アイステーシスという語と関係するように、身体の感覚を高めることに関わる。それは、私たちの感覚的受容の自己反省的な気づきを含んでいる」（シュスターマン 2019: 180）と主張するシュスターマンは、日本滞在時に禪を学ぶことを通して、それまでは美的対象に見えなかったドラム缶に美を見出せるようになったという¹²。ドゥルーズも、芸術に「感覚されるべきもの」を開示する力を見てとっていたし、薬力学的経験やめまいのような身体的経験は「感覚されるべきもの」にわれわれを接近させるとも言っていた（cf. Deleuze 1968a: 305）。

この開示的な側面は共通していると認めつつも、シュスターマンは自身の哲学とドゥルーズのそれとの間に相違点を見出している。シュスターマンの見るところ、ドゥルーズの哲学において並外れた経験が明らかにしているのは実在の高次の領域であり、そうした経験が通常の経験に存在論的に優っているということある。彼はこのドゥルーズの行論には賛成できないと表明している（Shusterman 2022b: 269）。

シュスターマンはドゥルーズが経験について論じる際に形而上学を持ち込んでいることに異を唱えているのだらうと思われる。ドゥルーズの『差異と反復』において、通常の経験が属する現働性の次元と、それに存在論的に先立つ潜在性の次元とが区別されていることはたしかである。だが、ドゥルーズはシュスターマンがそこで言うように「高次の実在の領域」に向かうことにのみ終始しているわけではないし、何か理想的な背後世界の存在を示唆しているわけでもない。前節で取り上げた「感覚されるべきもの」も潜在性の次元に属するが、その眼目は存在論的優位を示すことにあるわけではない¹³。

二人が共有するとされた哲学的志向のもう一つは「プラグマティックなスタンス」である。これについて、シュスターマンは、「私たちは二人とも、事物が何であるかを、固定された物質的構造や本質によってではなく、それらは何ができるか（*What they can do*）によって理解する傾向があ

ります」(Shusterman 2022b: 269 [強調: 引用者])と言う。

このシュスターマンの言明は、上で素描したスピノザ由来の身体論とその定式、「身体は何をなしうるか」を思い起こさせる。「身体とは何か」「事物とは何か」と本質や性質を探るのではなく、その機能を問うのである。身体や事物がいかにたらくかを重視するのは、シュスターマンとの突き合わせを越えて、ドゥルーズの哲学とプラグマティズム一般との親近性を示すものとも言いうるかもしれない。

シュスターマンは上の引用に続けて次のように言う。

私が考えるに、私たち二人はある信念、あるいは少なくとも希望を共有しています。より良い理解は経験と人の生き方を改善するという信念ないし希望を、そして、哲学は、単に馴染みの概念を明確化したり定義づけたりするのではなく、むしろ新たな概念を創造することによって、より良い理解を供給しようという信念ないし希望を共有しているのです。(Shusterman 2022b: 269 [強調: 引用者])

「人の生き方を改善する」というフレーズには、「生きる技芸」を重視する改善主義者としてのシュスターマンの態度が色濃く現れている。また、「新たな概念を創造する」という文言には、「哲学とは、概念を創造することを本領とする学問領域である」(Deleuze et Guattari 1991: 10)とガタリと共に宣言するドゥルーズの立場が強く反映されている。前者はアド的であり、後者は「新しい言葉を含む語彙からさまざまな対象を再記述する」(Rorty 1989: 78)ことでこれまでとは異なる世界の理解の仕方を提供しようとするローティ的であるとも言えるかもしれないが¹⁴、シュスターマンによれば、彼自身とドゥルーズはこの二つの要素をともに兼ね備えているということになる。次節で触れるように、ドゥルーズのテキストを前者に寄せて読む余地はあり、これがプラグマティックなスタンスを示す要素な

のであれば、ドゥルーズ哲学を「プラグマティック」と形容することができるだろう。

それでは逆に、シュスターマンは概念創造の営みをなしていると言えるだろうか。彼は、「身体感性論 somaesthetics」こそが、自身の提供する新たな概念であり、私たちの理解や経験を改善するための概念であると自負している。そして、シュスターマンは、「ドゥルーズと私は、身体実践は、新しく、かつ、より良い理解の仕方や生き方もまた生み出すことができるという観点を共有している」(Shusterman 2022b: 269)と主張するのである。社会政治学的な観点も含む身体感性論は、フーコー的な主体化＝従属化のプロセスによって育まれるような自動的な無思考の習慣を明らかにして克服する批判的な役割を果たしうるともシュスターマンは述べている(Shusterman 2022b: 269–270, n. 5)。これまでの常識や習慣を問い直して、身体ひいては自己の再構成を企図するという所作は、たしかに、共通感覚＝常識や良識(bon sens)から解き放たれた思考、可能な経験に合致する正則的な認識の下では不可能だった思考の発生について論ずるドゥルーズの哲学と重なっている(cf. Deleuze 1968a: 186–192)。

しかし、この点についてもシュスターマンはドゥルーズとの違いを忘れずに表明している。彼の見るところでは、ドゥルーズの推奨する身体的変容、すなわち「器官なき身体になること」は、ミステリアスな考えで、薬物中毒や問題的な身体行動を例に取ったりと、身体感性論が焦点を当てるような身体実践とはかなり異なっている(Shusterman 2022b: 269)。言ってしまうえば、シュスターマンにとってドゥルーズないしドゥルーズ＝ガタリの「器官なき身体になること」は過剰なのである。

5. 実験の過剰さと慎重さ

ひるがえれば、『プラグマティズムと哲学の実践』において、シュスターマンは自己の経験の再創造を試みている点ではフーコーを評価するもの

の、同時にフーコーが麻薬や SM といった実験的あるいは逸脱的な身体実践を行っていたことには批判的であった (Shusterman 1997: 27-28)。シュスターマンは同書の別の箇所、バタイユとフーコーとドゥルーズを並べ上げて、これらの思想家たちの非言説的な身体美学＝感性論が出来る時には、「急進的な侵犯というアヴァンギャルドのイデオロギー」(Shusterman 1997: 128) が結び付いてくるとも述べている。

フランス現代思想の思想家たちに対するこうした評価は、より漸進的な改良主義者であるシュスターマンの立ち位置をよく示しているようにも思われる。たしかに、上で見てきたように、身体に着目しつつ、自己を再構成するということをめざしているのは両者に共通している。しかし、シュスターマンからすると、フランス現代思想の思想家たちは過激で逸脱しすぎているのだろう。

こうした図式的な区分が妥当なものだとするならば、さらに次のように問うことができるだろう。フーコーの「別様に考えること」やドゥルーズもしくはドゥルーズ＝ガタリの「生成変化」は、シュスターマン（あるいはその思想的源泉であるデューイ）の「より良くなること」といった改良を重んじる思想と折り合いがつくのだろうか、と。習慣的な感覚や思考を解体して自己を新たに創造することをめざすのは共通しているにせよ、どのような手段をもってそれを達成するのか。ドゥルーズやフーコーが過激で逸脱的で過剰な方途を辞さないのに対して、シュスターマンを含むプラグマティズムの哲学者は一般にそうした破壊に通ずる可能性を孕む道は選ばないだろう。こうした態度の違いが、ドゥルーズやフーコーとプラグマティズムの分水嶺をなしていると主張することも可能かもしれない。

しかし、ドゥルーズやドゥルーズ＝ガタリが「器官なき身体」という語に関連して提示する手法は、本当にシュスターマンが考えるように過剰でやりすぎなのだろうか。実のところ、一般的なイメージからは外れるのかもしれないが、『千のプラトーン』の第 6 プラトーン「器官なき身体をいかに

して獲得するか」(Deleuze et Guattari 1980: 185–204)において、ドゥルーズ＝ガタリは身体の変容をめざす上であまりに過剰にならないように注意を促している。

回り道になるが、「器官なき身体 Corps sans Organes」という語でドゥルーズ＝ガタリがどのようなことを言おうとしているのか、簡略に整理しておこう。まず、器官なき身体は「組織化 organisation」からできる限り距離を置くために導入された考えであることをおさえる必要がある (Deleuze et Guattari 1980: 196)。階層的な秩序の形成や権力関係を含むさまざまな力の配置が凝り固まる地層化といった事態に対立すると言ってもよい。人々はその地層に捕らわれることで、その力能が制限されてしまう。そうした事態をもたらすとされ、槍玉に挙げられる標的は以下の三つである。一つ目は、有機体の秩序に従う器官である (たとえば、「食べるための口」として組織された口がそれにあたる。口はペンを咥えて書くというはたらきを主要なものとしてもよいはずである)。二つ目は意味性とその解釈や説明であり、とりわけ精神分析による解釈が批判される。三つ目は主体化であり、これはフーコーのいうような権力関係に自ら服する主体化＝従属化に類することを想起すればよい。「器官なき身体」は、これらの組織化、記号化、主体化に対抗する力を実験する身体なのである (Deleuze et Guattari 1980: 197–198)。

しかし、「器官なき身体」は組織化と対立するものであると説くのと同時に、ドゥルーズ＝ガタリは、有機体、意味作用、主体を構成する地層化は「器官なき身体」の上に形成されるという (Deleuze et Guattari 1980: 197)。彼らによれば、「器官なき身体」は、その身体を折りたたみ屈服させる地層化の表面と、その身体を展開して実験に向けて開く存立表面の二つの間で揺れ動いているのである。ここで描かれているのは、順応的で従順な身体へと向かう方向と、それに対抗する身体へと向かう方向の二つを「器官なき身体」は有していることである。

前述したように、シュスターマンはその身体の実験が過剰で急進的で破壊的であると問題視しているが、ドゥルーズ＝ガタリが組織化への対立を過剰なまでに徹底しているかというとは実はそうではない。極限を超えることを彼らは求めてはいないのである。たしかに、彼らはシュスターマンがフーコーを批判するときにも否定的な目を向けていた麻薬やマゾヒズムを実践の手法としてあげている。しかし、ドゥルーズ＝ガタリが「慎重さ、処方量のテクニックといったものが必要であり、オーバードーズは危険をとまなう」(Deleuze et Guattari 1980: 198 [強調：引用者])と言っていることは銘記されるべきである¹⁵。彼らは、「慎重さ *prudence*」をもって、自殺的な用法を避けながら、自己を解体・解放することを企てている。言い換えれば、秩序(地層)を完全に破壊することなく、いまとは異なる存在者に生成変化することをめざしているのである。

スピノザ的な観点からすれば、自身を「器官なき身体」へと向けかえて自己の構成を新たにする実験を行なう際に、その実験が最終的に自らの活動力能を高めずに低下させてしまったのであれば、その実験は失敗である¹⁶。ドゥルーズ＝ガタリは、シュスターマンがフーコーの身体実践に見たような暴力や死を回避しようと、オーバードーズやそれに類するような自己破壊的な手法からは身を引いている。彼らは、身体の構成を不可逆的に変えてしまう地点にまで進むことに警戒していると言ってもよい¹⁷。もちろん、ここでその地点はどこかが不明瞭であると指摘することはできるだろう。禅やヨガやフェルデンクライス・メソッドなど、身体を整える具体的で常識的な方策を提示するシュスターマンと比べれば、ドゥルーズ＝ガタリの議論はやはり秩序紊乱的といえる。しかし、シュスターマンの身体感性論がめざす改良とは齟齬があるだろうが、ドゥルーズもしくはドゥルーズ＝ガタリの身体実践においても、基調にあるのは、身体の力能を高めることであり、より良い生をめざすことなのである。

結語

まとめよう。本稿は、まずシュスターマンの思想を特徴づけることから始めた。ローティの影響を受けてプラグマティズムへと接近したシュスターマンであったが、彼のプラグマティズムはローティとは異なり「経験」の概念を重視している点が特徴的である。また、より良い自己やより良い社会を実現することをめざす改善主義も彼のプラグマティズムの基盤となっており、「身体感性論 (somaesthetics)」もこの二つの原理に沿って考案された概念である。この語の成り立ちが示しているように、シュスターマンは身体を単なる物理的なものとはみなしておらず、心的・社会的な次元を含んで生きている身体として捉えている。美学と感性論の両面を保持する身体感性論は、芸術や美だけではなく、むしろ日常の身体使用や身体訓練法を探究の対象として、身体経験の改良や再構成を目的として実際の身体訓練を重視するプロジェクトである。

ドゥルーズも「エステティック (esthétique)」に「感性論」と「美学」の二重の意味を込めているが、芸術作品は、共通感覚の形式の下にある習慣から脱し、「感覚されるべきもの」を経験する場になりうる。芸術を日常生活から切り離さずに、習慣化された身体や精神の再構成を重視するドゥルーズのこうした姿勢はシュスターマンと共通している。身体に関する考究において、ドゥルーズはスピノザの影響を強く受けており、身体を何か固定的な本質や特性をもつものとしてではなく、他の身体を触発すると同時に他の身体に触発されるものと捉えている。そのため、常に新しい変容の可能性に開かれているとも言えるが、どのように触発し、触発されるかをあらかじめ知ることはできないため、実際に実験することが重要とされる。活動力能を高めることをよしとするこの身体論は、シュスターマンの「身体感性論」が重視する改良主義的な視点と共通する部分がある。

シュスターマン自身の見立てによれば、彼とドゥルーズは身体の経験を尊重するという共通の志向を有しており、美的経験を含む非言語的な経験

に意義を見出している。ただし、やや誤解を含んでいる可能性もあるが、シュスターマンからするとドゥルーズの感性論には形而上学的なところがあり、そこは相容れないところであると主張される。他方で、本質よりも機能を重視することや概念を創造することを通して、経験の改善や新たな思考の発生を企てるというのも、シュスターマンとドゥルーズとで一致している。このような哲学的志向をプラグマティズムの主要な要素と捉えることができるのであれば、ドゥルーズもかなりの程度プラグマティズムに接近していると言えるだろう。

しかし、「器官なき身体になること」というドゥルーズのアプローチは、シュスターマンには過剰で、身体感性論の有する具体性から離れるものに映る。自己を再創造する場面において、シュスターマンを含むプラグマティズムはより穏健で健全な方向へと進むのに対して、ドゥルーズやフーコーらに代表されるフランス現代思想は急進的で不健全な方向へと進む傾向があると言うことが差し当たり可能であろう。だが、スピノザの身体論の観点からは、ドゥルーズやドゥルーズ＝ガタリも、極限的に過剰で破滅的ではなく、自己が完全に解体されるところまで進むことを避けているのを見て取れる。彼らは、身体の力能を高めることでより良い生を追求している。常識的な手法にはとどまらないものの、慎重さをもって自らの生を作り上げていくことを促し、別の健全さを提示しているのである。

註

¹ ドゥルーズ哲学とアメリカ・プラグマティズムとの関連を探る本格的な研究が始まったのは 2010 年代半ば以降である。とりわけ、この主題の探究に先鞭をつけたものとして、ビッグナルらの編集による論集『ドゥルーズとプラグマティズム』(Bignall, Bowden, and Patton 2015)を挙げることができる。本邦では、「バロック」の観点を導入しつつ、檜垣立哉がパースやジェイムズとの関係について論じている(檜垣 2019, 2022)。だが、共通点や対立点を探るにせよ、より拡張的な議論を構築するにせよ、まだ探究の余地は残されていると思われる。

² インタビューアーは中国の美学研究者ガオ・ヤンピン(Yanping Gao)である。そ

れもあってか、所収された論文集内での同インタビューの著者名は彼女の名で代表されている。しかし、本稿においてはシュスターマンの文言のみをそこから抜き出しているため、(Shusterman 2022b)と表記して参照を指示する。このインタビューに関連する事実として、この対話が行われるよりも先にドゥルーズとシュスターマンの哲学を比較したマウエツキとシュルースナーによる論考が上の注で触れた論集に収められている (Malecki and Schleusener 2015)。シュスターマンは同インタビューで、この論考には有益なところが多いことを認めつつも、自身の哲学を誤って解釈している点もあると語っている (残念なことに、どの箇所が誤りであるか具体的には論じていない)。

³ シュスターマンの掲げるプラグマティズムの十の原理は以下の通りである (Shusterman 2010)。(1) 現実の変化する、開かれた、偶発的な性質、(2) 最も理性的で認識的な探求や概念にあっても人間の行為や意図が優位にあること、(3) 非還元的で身体化された自然主義、(4) 反アカルト主義、(5) 共同体、(6) 経験的、経験優先の姿勢、(7) 未来志向、(8) 改良主義、(9) 全体論、(10) 多元主義。

⁴ 実際にバーンスタインは引用箇所に付された注において、経験の重要性と意味を強調してきたプラグマティズムの解釈者として、ジョン・E・スミスとジョン・マクダーモットとともにシュスターマンの名を挙げている (cf. Bernstein 2010: 232, n.6)。

⁵ とはいえ、シュスターマンは言語論的転回の価値を全く認めていないわけではない。彼が恐れているのは、それが過剰に適用される事態である (cf. Shusterman 1997: 171)。

⁶ デューイ、ウィトゲンシュタイン、フーコーの「生き方としての哲学」が題材として取り上げられている。(cf. Shusterman 1997: 17-64)

⁷ cf. Sneevarr (2022), pp. 29-31

⁸ なお、シュスターマンは『身体意識』のなかで日本語の「身体 (shintai)」にも言及している。曰く、「「身体」とは、「生きている、知覚的、感覚的、動的で、知的な身体性であり、志向性、心、精神的なものを伴っており、心や精神がそれから区別され対立させられるべき、単なる物質的な対の一方ではない」 (Shusterman 2012: 227)。彼は日本語の「身体 (shintai)」に soma とほぼ同じ特徴を見て取っている。

⁹ 『スピノザと表現の問題』(1968年)に先立つ『ニーチェと哲学』(1962年)の第二章第一節の小見出しにこの定式がすでに採用されている。

¹⁰ この整理はマウエツキとシュルースナーによる論考に負うている (cf. Malecki and Schleusener 2015: 217-219)。

¹¹ ここでドゥルーズは生態学的なアプローチを取りつつ印象的な例を示している。ドゥルーズによれば、農耕馬と競走馬とではその各々の身体を取り巻き触

発する環境が大いに異なっているために、各々が有する情動や触発される力の相違は、農耕馬と農耕牛との間にあるそれよりも大きい。

- ¹² この点については李恵珍による整理を参照されたい（李 2015）。
- ¹³ 上で触れた「感覚されるべきもの」の議論の他には、「潜在性」とほぼ互換的に用いられる「理念」や「問題」に直面して、これまでとは異なる仕方でも物事を感覚し、思考する道筋を描いてもいることを指摘できる（cf. Deleuze 1968a: 214–216）。千葉雅也は、ドゥルーズ哲学における潜在性と現働性の区別に関して、前者が後者に対して優位に立つことだけにとどまらないことを詳しく論じている（cf. 千葉 2017: 303–309）。
- ¹⁴ 『差異と反復』の英訳者でもあるポール・パットン（Patton 2015）は、ローティとドゥルーズを比較して、両者の哲学はともに再記述の哲学であると論じている。
- ¹⁵ 後年の『哲学とは何か』においては、麻薬の使用によって得られた構成は維持することができず脆いと述べられている（cf. Deleuze et Guattari 1991: 156）。ドゥルーズ＝ガタリも麻薬の使用は避けるべき手法と捉えるに至ったことが指摘できる。
- ¹⁶ 英語圏におけるドゥルーズ＝ガタリ研究の第一人者であるイアン・ブキャナンも、ドゥルーズが侵犯的な身体実践を無批判に浪漫的なものとして肯定していると考えるのは誤りであると指摘している（cf. Buchanan 1997: 88）。この点に関してはマウエツキとシュルースナーの論考も参照した（cf. Malecki and Schleusener 2015: 228）。
- ¹⁷ 一歩手前、ベニユルティエムで止まることを要請していると言い直してもよい。飲み過ぎで病気になるまで酒を飲んでではなく、限界の一歩手前で飲むのを止めなくてはならない（cf. Deleuze et Guattari 1980: 546）。

参 考 文 献

- Bernstein, Richard J. (2000), *The Pragmatic Turn*, Polity Press.
- Bignall, S., Bowden, S. and Patton, P. (eds) (2015), *Deleuze and Pragmatism*, Routledge.
- Buchanan, Ian. (1997), “The Problem of the Body in Deleuze and Guattari, Or, What Can a Body Do?” *Body & Society*, 73(3): 73–91.
- Deleuze, Gilles (1962), *Nietzsche et la philosophie*, Presses Universitaires de France.

- Deleuze, Gilles (1968a), *Différence et répétition*, Presses Universitaires de France.
- Deleuze, Gilles (1968b), *Spinoza et le problème de l'expression*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles (1981), *Spinoza : philosophie pratique*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles (1983), *Cinéma 1 : l'image-mouvement*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles (1985), *Cinéma 2 : l'image-temps*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles (1986), *Le pli : Leibniz et le baloque*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles (1993), *Critique et clinique*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles (2002), *L'île déserte et autres textes: textes et entretiens 1953–1974, édition préparée par David Lapoujade*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles et Félix Guattari (1983), *Mille plateaux*, Édition de Minuit.
- Deleuze, Gilles et Félix Guattari (1991), *Qu'est-ce que la philosophie?*, Édition de Minuit.
- Małecki, Wojciech and Simon Schleusener (2015), “ “What Affects Are You Capable Of?” On Deleuze and Somaesthetics” in Signal, Bowden and Patton, (eds) *Deleuze and Pragmatism*, Routledge, pp. 216–234.
- Misak, Cheryl (2013), *The American Pragmatists*, Oxford University.
- Shusterman, Richard (1997), *Practicing Philosophy: Pragmatism and the Philosophical Life*, Routledge.
- Shusterman, Richard (2000), *Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art* (2nd edition), Rowman & Littlefield.
- Shusterman, Richard (2010), “What Pragmatism Means to Me: Ten Principles”, *Revue française d'études américaines*, no. 124, 59–65.
- Shusterman, Richard (2011), “Soma, Self and Society: Somaesthetics as Pragmatist Meliorism”, *Metaphilosophy*, vol. 42, no. 3 (April), 314–327.
- Shusterman, Richard (2012) *Thinking through the Body: Essays in Somaesthetics*, Cambridge University Press.
- Shusterman, Richard (2022a) “Somaesthetics, Pragmatism, and the Man in Gold:

- Remarks on the Preceding Chapters” in Abrams, J. ed. *Shusterman’s Somaesthetics: From Hip Hop Philosophy to Politics and Performance Art*, Brill, pp. 243–260.
- Shusterman, Richard (2022b) “On the Path of Somaesthetics: An Interview with Richard Shusterman” in Abrams, J. ed. *Shusterman’s Somaesthetics: From Hip Hop Philosophy to Politics and Performance Art*, Brill, pp. 261–278.
- Snœvarr, Stéfan (2022) “Shusterman’s Pragmatist Philosophy”, in Abrams, J. ed. *Shusterman’s Somaesthetics: From Hip Hop Philosophy to Politics and Performance Art*, Brill, pp. 22–43.
- Patton, Paul (2015), “Redescriptive Philosophy: Deleuze and Rorty” in Bignal, Bowden and Patton, (eds) *Deleuze and Pragmatism*, Routledge, pp. 145–162.
- Rorty, Richard (1982), *Consequences of Pragmatism*, University of Minnesota Press.
- Rorty, Richard (1983), “Unsoundness in Perspective,” *Times Literary Supplement* (June), 17: 619–620.
- Rorty, Richard (1989), *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press.
- 伊藤邦武 (2016) 『プラグマティズム入門』, ちくま新書
- 千葉雅也 (2017) 『動きすぎてはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』, 河出文庫
- 檜垣立哉 (2019) 「パースとドゥルーズ 基層における交錯」, 檜垣立哉, 小泉義之, 合田正人編著, 『ドゥルーズの 21 世紀』, 河出書房新社, pp. 307–329.
- 檜垣立哉 (2022) 『バロックの哲学——反-理性の星座たち』 岩波書店.
- 樋口聡 (2019) 「現代日本における身体感性論」, 樋口聡, ゲンター・ゲバウア, リチャード・シュスターマン著『身体感性と文化の哲学 人

間・運動・世界制作』，勁草書房，pp. 186–203

李惠珍（2015）「リチャード・シュスターマンの「内在的変容」について：
アーサー・ダントーの「変容」論との比較から」，『美学』，日本美
学会，第 66 卷 1 号，pp. 101–112.

シュスターマン，リチャード（2019）「身体感性論と教育」，樋口聡，ゲン
ター・ゲバウア，リチャード・シュスターマン著『身体感性和文化
の哲学 人間・運動・世界制作』，勁草書房，pp. 175–185.